市民の目線で市民が発信する
地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com/

SHIMIN PRESS

市民プレス：第25号

発行人　特定非営利活動法人
「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作・印刷　デジタル工房
ＦＡＸ　048（476）9111
〒353-0004
埼玉県志木市本町5-18-24

年頭に当って

首都圏でクリエイティブな暮らしをエンジョイしよう

首都圏は日本の行政、経済活動などの中枢を占める。東京都はその核をなしているが、これに京浜地区を加え、さらに近接する千葉、埼玉が担う副都心の機能が加えられて、首都圏内の活動は活発になってゆく。

圏内の交通網は地下鉄の敷設、高速鉄道網、高速道路の建設によって整備され、住宅は高層化に向かって、居住環境は激しい変化を遂げている。ビルは空を覆い、景観は劇的な変貌を遂げてゆく。

しかし足下の地面を踏み締め、ビルや家屋が建つ土地に想いを馳せてみよう。

いまの東京を中心とする首都圏は、広大な武蔵野台地の上に載っていて、この扇形の台地は、元はと言えば秩父山塊の麓、都下青梅市付近に発し、多摩川、入間川などの河川が運んだ土砂、土地の隆起、火山灰の堆積によって作られた。この大地は、青梅からわずかに百㍍の高度差で東京湾の方向に広がっている。

5～6千年前には、東京湾が深く入り込み（「縄文海進」、本紙20号）、台地の裾を洗っていた。その崖線は埼玉県の西北、川越市域から和光市を経て、丁度ＪＲ京浜、山の手線が走る王子、日暮里、上野を通り、さらに南下して品川、大森にまで延びている。各地で見いだされている埋蔵文化財の「貝塚」は明らかな海進の証拠だ。

古くからの地誌を蘇らせるとき、いま躍動しつつある現代の首都圏の大地は、共通の武蔵野台地の上に所在することが読者の方々に納得して戴けるものと思う。

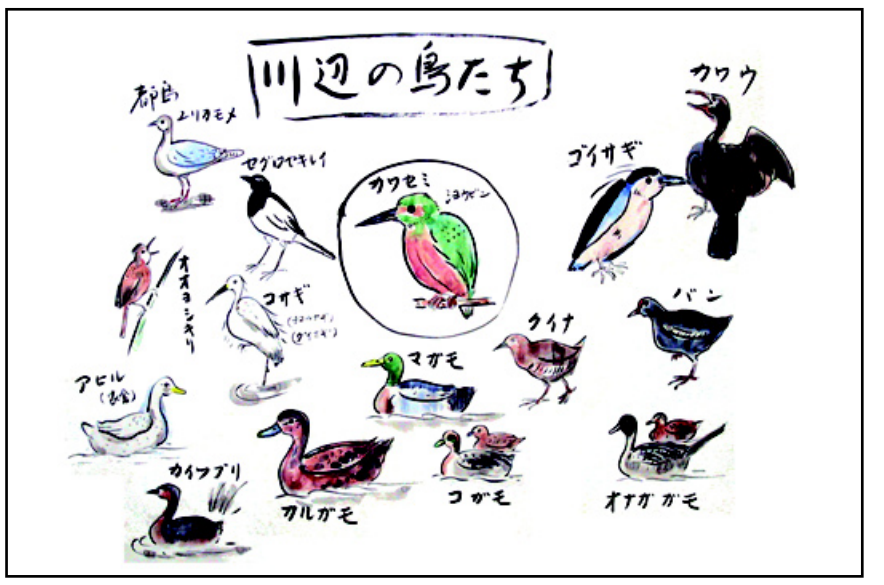
いまここで暮らす人々の祖先は、何万年もの前のこと、悠久の石器時代、弥生地代から居住し、集落をつくり、ときには戦いにまみれながら、地域に暮らし、それぞれの文化を築いてきた。江戸時代に繁栄した東京の下町から、明治以後には山の手に居住地域が拡大され、地方から移り住む人々も急増した。人々の住まいは、戦後さらに放射状にベットタウンへと延び、拡大した通勤圏が生まれた。最近になって外国からも多くの人々が移り住み、多くの外国人を交えて、国際化へと向かっている。

悠久の台地の上に構築され、いま躍進を続ける首都圏で暮らす人々は、古さと新しさが激しくぶつかりあう地域で、またとない時、夢を抱いて、自らのクリエイティブな生活を目指すべきではないだろうか。

原風景・冬の冨岡家

280年程前に建築された県内最古、最大規模の民家と推測されている
（和光市の文化財として指定され、市内下新倉に移築、復元工事中）

詩人・細田千虎氏描く



プロフィール：志木市宗岡生まれ。従軍して青春を戦争に捧げた詩人
詩集「川のほとり」ほかを出版し、「志木短歌会」を主宰。日本鳥類保護連盟会員

首都圏の動脈を空から

Bird's Eye View

関越新座料金所

荒川を渡るJR武蔵野線（朝霞市上内間木、戸田市）

彩湖を渡る外環 - 和光市から戸田市に向かう -

CREATIVE BOOK「首都圏人」第一号発売御案内

編集・NPO市民フォーラム
発売・ブッキング

「NPO市民フォーラム」は、このたび首都圏に住む人々のクリエイティブ・ライフを支援するためのCREATIVE BOOK「首都圏人」第一号を発刊しました。

一般書店で販売中です。御高覧を戴きたく謹んでお願い申し上げます。

B5版100ページ、
定価・本体600円＋税
ISBN4-8354-7204-7

歴史を紐解く　その24

みぞぬま 溝沼を歩く

―川と湧水と獅子舞のまち―

安斎　達雄

川と台地の街

溝沼という地名から何を連想するだろうか。溝といい沼といい、低湿地を思いおこさせる。地名の起源も、かつて沼地が広がり、北方へ排水溝を通したことに由来するという。

現在の溝沼を歩いても、じめじめした湿地という感じはまったくない。しかし、大ざっぱに地形をながめると、中央部を南西から北東に向かって目黒川が流れ、川の両側に広がる沖積低地をはさんで左岸と右岸には、ともに台地が帯のようにつらなっている。

川の左岸・右岸は、下流に向かって左側が左岸、右側が右岸である。だから溝沼から見て泉水や東弁財が左岸、本町や岡が右岸となる。

塩味里起さん

この地形を確認するため、例えば朝霞市市役所通りと城山通りがクロスする本町一丁目の交差点から溝沼めぐりをはじめてみよう。

この交差点は溝沼一丁目一番地にも接している。そこから塩味病院に向かって歩く。この道は、右岸の台地上にある城山通りから下りる坂道だ。地図でみると、ほぼ直角に川に向かっていく感じだ。案内版によると、ここを金子坂という。江戸時代に溝沼村の名主金子彦兵衛が切り通した坂道だという。朝霞では、寺社の歴史や由来を紹介する案内版はほとんど見かけないが、坂の名の由来を示す案内版はよく見かける。これも一つの特色といえば言える。

歴史のある醤油醸造

金子坂を下りると、しばらくは低地だ。少し横道にはいって塩味醤油醸造に向かう。ここには、江戸末期の白壁土蔵、明治時代の木造平屋建て倉庫、大正時代の木造一部二階建ての住宅兼店舗、平成四（一九九二）年に建て替えられた醸造工場などがある。

醤油資料館と土蔵

創業は幕末の慶応元（一八六五）年としているが、本当はもっと古くからあった可能性があるという。その商標は「ヤマヤナギ」。醤油醸造は昭和二十九（一九五四）年に先代が亡くなったあともその夫人・里起さん（現当主の母堂）によって引き継がれたが、昭和六十（一九八五）年には時代の変化と体調不良のため休業をやむなくされた。

今年はじまった
近代化遺産の日（10月10日）
そっくり保存されている塩味醤油の帳場

しかし、現当主・塩味正雄氏は病院を経営するかたわら、平成にはいってから醤油醸造を再開した。国内産丸大豆、小麦、麹など吟味した原料だけを使い、それらを昔ながらの杉の木の樽に仕込んでつくりあげる。もちろん、添加物、保存料などは使用していない。

明治時代の倉庫は、現在「醤油資料館」として公開されている。醤油漉し、醤油詰、麹蓋、どれも素朴なものだ。店員が着たのだろうか、ヤマヤナギの商標がはいった半纏もあり、こじんまりとしてはいるが、どこか懐かしい感じがする。

ちょっと気になるのは、明治十三（一八八〇）年に参謀本部が調査した「偵察録」に、溝沼村には醤油生産の記録がないことだ。なにかの事情で醤油醸造が中断した時期があったのだろうか。

黒目川べりの泉蔵寺

道を少しもどって泉蔵寺に向かう。ここらから、また緩やかな下り坂になり、黒目川に向かってさらに土地が低くなっていることがわかる。

泉蔵寺は、もともとは対岸の台地上、現在の泉水三丁目の地にあったと言われ、室町時代の初期には寺院経営がおこなわれていたようだ。それが、江戸時代の十八世紀初頭に現在地に移ってきたと考えられている。発掘調査の結果、全面にわたる土の焼痕、火葬墓と思われる土壙（墓穴）四十五基、ほかに古瓦片、金銅製仏具片などが発見された。この地には、泉蔵寺が移転してくる以前、亡骸を仮におさめて喪に服す、喪屋があったらしい。

ところが、この施設が火災にあって消失し、そのあと対岸の八〇〇㍍ほど離れた泉水山の上から寺が移ってきた。もとの寺名は泉通院といったが、その「泉」と本尊である延命地蔵菩薩の「蔵」をとって泉蔵院と名づけたという。ここに正徳四（一七一四）年の銘のある銅鐘があり、市指定の文化財となっている。第二次世界大戦にさいしては、他の寺院の鐘と同様に金属類の供出の対象とされ、朝霞駅まで運ばれたが、貴重なものだとのことで戻されたという。

寺が山から下りて来るについては、黒目川の治水の状態がよくなったので、布教の便のよい低地に進出をはかった、という面もあったと思われる。

台地の上の古い遺跡

泉蔵寺の裏にでると黒目川はすぐそこだ。川にかかる泉橋を渡り黒目通りを横切ると、そこからすぐに上り坂となる。黒目川右岸の低地はわりと広いが、左岸の低地は狭い。坂の途中から進路を北に変えて進むと本田技研朝霞研究所に出る。この辺り一帯は泉水山・富士谷遺跡と呼ばれる地域とも重なる。黒目川左岸の標高十～二十六㍍の台地から低地に下りる急斜面に位置する。かつては泉水山・下ノ原遺跡と呼ばれていたが、平成四（一九九二）年の遺跡名称の整理・統合により現名称に変更がなされた。

この泉水山・富士谷遺跡は、旧石器時代、縄文時代早期・前期・中期・後期、弥生時代後期～古墳時代初頭、平安時代、中世、近世の遺跡・遺構が確認されている。ことに、黒曜石でつくられたナイフ形石器など、旧石器群の質と量の豊かさにおいては近隣では群を抜いている。すぐ下に水場のある台地は生活に便利であるため、早くから人が住みついたところが多いが、ここはその典型的なところであろう。

湧水のある「滝の根公園」

溝沼を一応横断したので、今度は塩味病院の下、金子坂の下にもどって、右岸の台地下の縁を北に向かって歩いてみる。塩味病院のすぐ北隣は「滝の根公園」である。ここは、朝霞駅方面からつづく根岸台地の縁にあたるところで、水が湧き出ている。木がこんもりと繁った小さな山があり、親水公園として整備されている。根岸台地が低地と接する縁の部分には現在でも湧水地が多いが、滝の根公園もその代表的なものである。

この台地の公園の下につながる低地が古くからの溝沼の中心地域であり、その先に黒目川が流れているという構造だ。

滝の根公園の池

溝沼の守り神氷川神社

滝の根公園から北方向に氷川神社に向かう。氷川神社の主祭神といえばスサノオノミコトに決まっているように思えるが、ここの主祭神は妃のクシナダヒメである。スサノオもまつられてはいるが、その他の七祭神の一つとしてである。というのも、もとは地類神社とよばれていたが、明治四十一（一九〇八）年に地域の神社の統合がおこなわれることになったとき、新しい神社の名は、埼玉・東京に多い氷川神社としたほうが通りがよいのではないか、ということでこのように変えられたものという。

この地に地類神社がおかれたのは、寛文年間（一六六一～一六七三）の頃という。村人がこの地で偶然に地類権現と彫り付けた石を見つけたので、この地を支

金子家の庭先で - 古式の舞 -

配していた中山氏が社をたてようとしたところ、そこは古くから稲荷山と呼ばれていたことがわかった。そこで、おそらく社地の跡だろうと考え、石をまつって地類神社を建てたという。「地類」とは土地の守り神と考えてよいだろう。ついでながら、溝沼六丁目内のやや東北部はかつて「古屋敷」と呼ばれ、江戸時代の前半期に中山氏の屋敷があったところという。

地類神社については、こんな話もある。この地を支配していた中山氏の娘てる姫が、下働きの男と恋をし身ごもった。怒った中山氏は男を打ち首にした。悲しんだ姫は近くの池に身を投げて死んだので、供養のためその池から石を拾って地類神社を建てたという。

溝沼を巡る獅子

氷川神社の南西方向近くに光善寺がある。墓を中心とした寺で、江戸中期以降は泉蔵寺の兼務寺となっている。しかし、中世のものと思われる阿弥陀如来があること、また、この辺り一帯がかつて「大屋敷」という字名で呼ばれていたことなどから、中世から開けていたとの伝承がある。今でも辺りには旧家が多い。

その旧家の一つ金子家から出発する「溝沼獅子舞」は、四〇〇年以上の歴史を持つ祭礼である。家内安全・厄病除けを願うことからはじまったもので、大獅子、中獅子、女獅子の三頭からなる舞である。穏やかにくらしていた三頭だが、大獅子と中獅子が女獅子をめぐって格闘となり、中獅子が負けて引き下がって再び平和になるという想定という。現在は、四月と十月の第一日曜日に獅子舞がおこなわれている。

小さな神社が氷川神社に統合される以前、獅子舞は十二か所もの寺社をまわったというが、現在では主要な三つの寺社である光善寺、泉蔵寺、氷川神社を、毎回順路を変えてまわるという。今はいくつもの村が集まって町や市になったが、もともと村はまとまった独自の世界をつくり上げていた。

溝沼の獅子舞は、住民たちの安全と幸福を祈願しつつ、生活をともにしていた地域の過去と現在を確認しながら巡っているように思える。

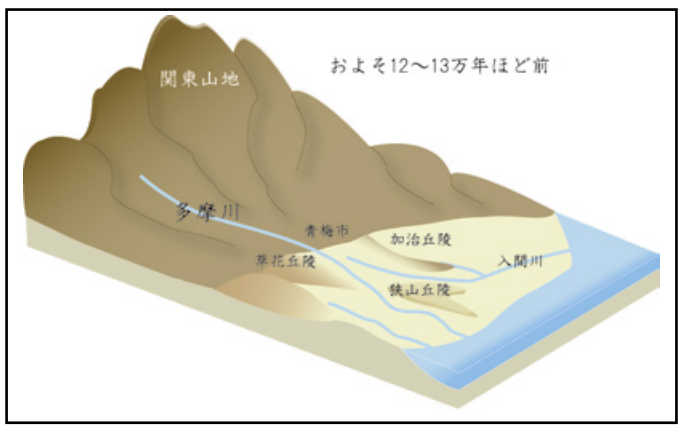
溝沼の獅子
（朝霞市指定民俗文化財）

歴史を紐解く（ひもとく）

ウォーキング　青梅を歩く

私たちが住む武蔵野台地は、東京都青梅市の方向から、狭山丘陵を越えて扇形に広がっていて、緩やかに下りつつ低地に移る。かつて秩父山地から流れ出ていた川によって運ばれた砂礫が現在の台地をつくった（台地の地誌については、本紙20号を参照）。

およそ200万年ないし50万年前の海岸線は、現在の海抜180㍍付近にあって、青梅を要として扇状地をつくり、沖合にあったいまの昭島には、アキシマクジラが生息していた。



その後海岸線は次第に東に後退し、およそ12・3万年前になると、現在海抜50㍍付近にある吉祥寺、善福寺、東久留米を結ぶ線まで退いて、加治丘陵や草花丘陵が姿を見せた。

2万年前には、海抜がいまより100㍍も低くなって海岸線はさらに沖合にあり、東京湾は陸地となった。地盤の隆起と当時の箱根山や富士山の火山活動による大量の火山灰が降り注ぎ、この火山灰は風化して関東ローム（赤土）となった。そして川の流れと地盤の隆起によってつくられた河岸段丘を被っていった。

しかし6000年前の「縄文海進」によって海岸線は再び北上し、川越付近まで海が入り込んでいった（「奥東京湾」と呼ばれる）。いまの新河岸川、隅田川沿いに残された多くの貝塚は明らかなその証拠になっている。

さて北朝霞からJR武蔵野線に乗車、西国分寺で中央線に乗換え、立川でもう一度青梅線に乗換えると、快速であれば立川から30分あまりでJR青梅駅に着く（写真❶）。

駅の出口を数十㍍進むと青梅街道に突き当たり、右折して商店街を往く。右手は山並み、左手は下って多摩川に降りる。この地形がつくり出す景観は青梅ならではのもの、しかも落着いた家並み、歴史を偲ばせる店構えが残されている。

右側に都指定有形民俗文化財の旧稲葉家住宅がある（❷）。繁栄した青梅宿で材木問屋を営み、また青梅縞の仲買いを営んだ豪商で、蔵造りの店が公開されている。

その手前左側の「柳屋家（❸）」は貴重な建造物をもつ旧家だが、いまも変わらず座売りでお茶とお米を販売していて盛業中。さらに街道は「森下陣屋跡」に突き当たり、カーブして奥多摩に向かう。

少し手前にもどって坂を下ると「金剛寺」の山門が見えてくる。寛永年間以前に建てられたと推定され、都の有形文化財に指定された。境内にある梅の老木は、秋になっても青々とした実は落ちないので、青梅という地名の由来になったと言われている。都指定の天然記念物。

ここから多摩川べりに下り、川辺に佇む「青梅市郷土博物館」を訪ねることにしよう。

金剛寺前の道を下り、突き当たって左折、しばらく行くと多摩川を渡る万年橋の大通りに出る。これを右折して下り、バス停「大柳（おおやなぎ）」（青梅駅から都バス吉野行きに乗車してもよい）で今度は左折、小道は市営プールの傍を通って柳淵橋を渡り、右の崖線に沿って進むと目指す博物館に着く。

手前には、重要文化財の「旧宮崎家（❹）」が移築されている。一帯は「釜の淵公園」として整備され、家族、グループの行楽に絶好な環境を提供している。

この市営の博物館は、由緒ある青梅の史跡と文化財に関連する多くの資料を集めて展示し、また市民の憩いの場としても機能する類い稀な立地をもっている。

目の前にかけられている吊り橋「鮎美橋（❺）」を渡り、大きくはないが、「青梅駅」への道標をたどりつつ新青梅街道を渡り、急な坂の小道を行くと、JR青梅駅に戻ることができる。

余裕があれば、あらかじめ情報を集めておき、山歩きの用意をして、無尽蔵とも言える文化財を訪ねたい。歴史を振り返りつつ、あわせて武蔵野台地の要に当たる地誌と類い稀な景観を楽しみたい。

❶ JR青梅駅前

❸ 柳屋家の店頭で

❷ 旧稲葉家

❹ 移築された旧宮崎家

❺「鮎美橋」の上から多摩川の上流を眺める

くらしのヒント

ウイルスを排除する免疫のメカニズム

新型インフルエンザウイルスが発生する懸念が世界的に広がっている。アジアでの流行は収まる気配はなく、最近中国では鳥インフルエンザの感染が確認された。

新型インフルエンザは鳥のウイルスが、人や豚の体内で混ざり合って人から人への感染力を獲得するものと考えられている。

通常のインフルエンザの対策は、ワクチンの予防接種だが、新型ウイルスが発生する前に開発することは事実上不可能であり、また発生してすぐワクチン製造にかかっても、少なくても半年かかる。

いま注目されているのは、抗ウイルス薬のタミフル（一般名リン酸オセルタミビル）は、ウイルス表面のたんぱく質に作用し、細胞内で増殖したウイルスが外に出ることを妨げる。発症後48時間以内に服用を始めれば、体内のウイルスの増殖を抑え、症状の緩和が期待される。そこで「タミフル」を備蓄することは官民の緊急の課題になっている。

しかしタミフルを服用した中学生が異常行動のあと死亡した事例があり、その副作用が心配されており、日本人はタミフルを使い過ぎるとの指摘もある。

インフルエンザウイルスの感染を防御するために、自分を自分で守るために、「免疫」に注目することにしよう。

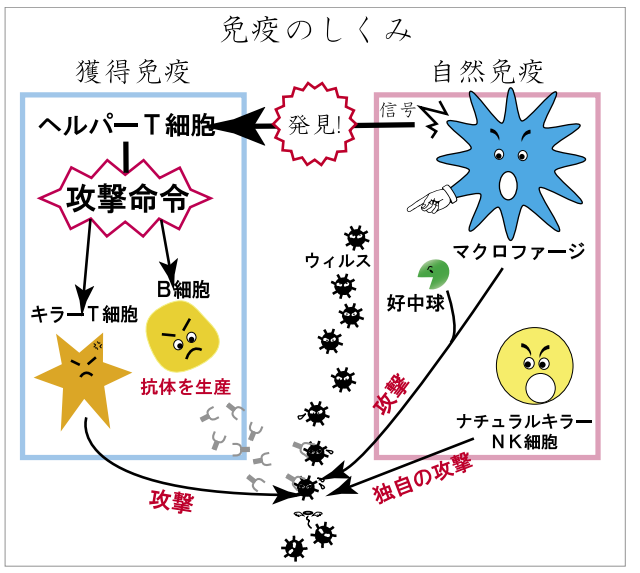
ウイルスはいろいろな経路で我々の身体に入り込んでくる。消化器から侵入したウイルスは、胃腸まで運ばれると、ほんどの場合、胃酸で死滅するが、一旦細胞の中に入ってしまうと、増殖をはじめ、細胞が死ぬまで、猛烈な勢いで増殖する。

ところが、もともとウイルスは生体にとっては異物なので、これを異物として認識し、排除する生体の防御がはたらく。生体は「免疫」のメカニズムを備えている。免疫の機構は複雑だが、その流れを追ってみよう。まず働くのは「自然免疫」だ。

自然免疫とは・・・・

その種類に関係なく、ウイルスを異物とみなして攻撃するメカニズムを、自然免疫と呼んでいる。実際にはかなり複雑なものだが、重要な役割を担うのは「マクロファージ」、そしてナチュラル・キラー細胞、インターフェロン、発熱の四つがある。

マクロファージは大食細胞とも呼ばれ、食欲が旺盛な細胞で、身体に侵入した異物は見さかいなく飲み込む。その細胞の内部に含まれている種々の消化酵素によって消化し、分解する。



細胞では、インターフェロンと呼ばれるたんぱく質が作られて細胞の外に放出される。インターフェロンは正常な細胞に作用して、ウイルスに対する抵抗性を与える働きを持っている。そのためウイルスは拡がることが押さえられる。

発熱は多くのウイルス感染で見られる症状だが、発熱は一方では免疫反応を強める作用をもっている。

これら四つのメカニズムが自然免疫の主なものだが、ウイルスに感染してから一日から二日後という早い時期から働きはじめるので、ウイルスによる感染の初期の重要な防御のメカニズムと言える。しかし、防御のメカの主役は実は「獲得免疫」なのだ。

獲得免疫とは・・・・

ウイルスに感染して数日たつと、本格的な免疫反応が働きはじめる。

マクロファージはウイルスの侵入の信号をヘルパーT細胞に送り、ウイルスと戦わせる。高熱が出て咳も激しくなっているときがこの状態だが、一方でウイルスに対抗する抗体をB細胞に指示して生産させ、抗体によってウイルスを撃破する。この戦いでウイルスに勝てば治癒に向かってゆく。

それと同時にT細胞、B細胞はこのウイルスの情報を記憶し、再侵入してきたときに備える。一度感染したら免疫記憶が残って、同じウイルスには再び感染し難くなるということを意味している。

病気を克服した人には強い免疫が残り、同じウイルスには二度とかからなくなるが、環境の変化やストレス、食生活によって現代人の免疫力は低下する。

一方ウイルスは強い免疫ができる前に、咳などと一緒に放出され、それをほかの人が吸い込むと感染するので、存続を図ることになる。ウイルスは免疫を回避する変異の戦略をも持っており、決して侮ることはできない。

ウイルスの話はまだつづきます。

2年を懸けて大曲に取り組んだ「志木第九の会」の快挙

志木第九の会は12月23日、第11回定期演奏会を志木市民会館で開いた。2時間に及ぶメンデルスゾーン作曲、オラトリオ「エリア」の演奏は満場の聴衆を魅了した。

美しい旋律に満ちた名曲は、音楽監督・三澤洋史、管弦楽・東京ニューシティ管弦楽団、8名の独唱者、志木第九の会合唱団の大編成によって演奏された。

「エリア」はヘブライ語で「エホバは神なり」の意、旧約聖書に出てくる預言者として、エホバ信仰を守るために、宗教闘争に立ち上がった。

「志木第九の会」は1991年、志木市市制施行20周年記念の第九演奏会終了後、参加者有志を母体として結成された。指揮者として招聘された三澤洋史氏はそれ以来引き続いて音楽監督として、ベートーベンの交響曲第九、ハイドンのオラトリオ「天地創造」、「四季」、モーツァルト「レクイエム」、「戴冠ミサ」、「ミサ曲」、ヘンデルのオラトリオ「メサイア」の指揮を取られた。一昨年は安藤常光氏によるフォーレ「レクイエム」が演奏され、志木第九の会は、コミュニティー文化の向上、地域社会への貢献のための活動を続けている。

今回の「エリア」の演奏会は、志木市、同教育委員会、（株）メディアッティ東上などの後援によって開催されたが、志木第九の会の持つ大きなエネルギーが、地域の活性化に寄与することを期待したい。

三澤氏（左）と岡嶋さん（右）

左写真は音楽監督・指揮者の三澤洋史氏

ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業、「バイロイト音楽祭」祝典合唱団の指揮スタッフを経て、2001年新国立劇場合唱団の指揮者に就任、音楽ヘッドコーチを兼任し、同劇場で重要な責任を担っている。

声楽を伴う様々な音楽に精通し、言葉と音楽の接点を追求している方である。

演奏の前の最終的な打ち合わせをするのは「志木第九の会」を牽引してきた事務局長の岡嶋さん。

事務局へのお問い合わせはTEL・FAX 048（473）6368へ。

特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

＊　＊　＊

◇　読者の「オピニオン（意見／考え）」を募集します。

TEL　090（3048）5502

編集部　原宛にどうぞ